

図書館より

図書館の『はたらき』は国を越えて届くか

江上敏哲

日文研図書館 初夏のにぎわい

毎年六月下旬ごろになると、日文研図書館のカウンターはにわか慌ただしくなってくる。欧米など多くの海外の大学が年度末を迎え、各国の学生・研究者たちが夏休みを利用して日本、そして日文研へ文献調査に訪れるためである。日文研図書館では外書（外国語で書かれた日本に関する本）や日本研究のための資料を収集している。他の図書館にも資料は所蔵されているだろうが、関係する資料が一堂に会しており

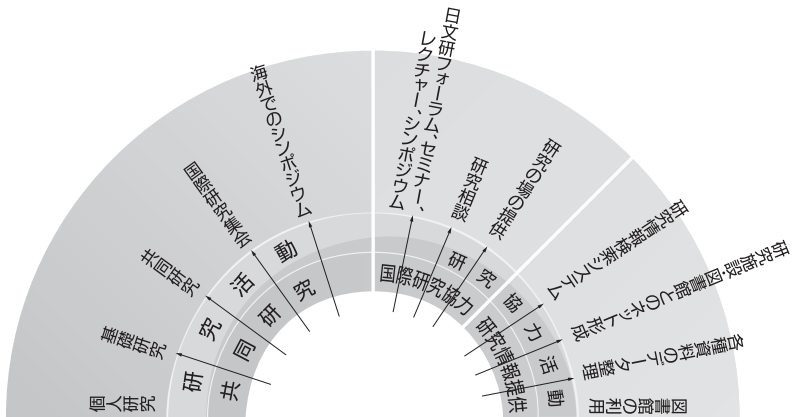
あちこちへ移動しなくてもよいという点で、時間や利用の制約の多い海外からのユーザには使い勝手がよいであろう。国内のユーザにしても同様で、日文研の持つユニークな蔵書、マイクロフィルムや和本、洋書などを求める人たちが、やはり夏休みや学期末に入ると増えてくる。

日文研図書館が海外・国内の他の機関の人びとに利用されるのと同じく、日文研の院生・研究者もよその図書館や資料館を多く利用する。日文研図書館では国内外の様々なコレクション・文庫などの冊子目録を収集しており、館内でそれを参照した上で方々へ出かける、または複写を取り寄せる。言わば『ハブ』としての機能も持っている。データベースのインターネット公開も、互いに提供・利用し合うという意味では同様である。

日文研の活動には「研究活動」と「研究協力活動」の二つの柱があり、「研究協力活動」はさらに「国際研究協力」と「研究情報提供」とにわかれる。その『協力』の比重が最も大きく、図の半円の右端にあたるのが、「図書館の利用」である。日文研が研究協力機能を果たすにあたり、図書館はそのゴールキーパーのような位置にあると言える。キーパーと異なるのは、できるだけ多くのボールをお迎えするべき立場、という点である。

図書館は横のつながりなしに成り立たない

日文研に限らず、そもそも図書館という機能・施設自体、他館・他者との『相互協力』なしにはその活動をまっとうできないものである。図書館は、館種・規模・国内外を問わず、互いに協力・連携し合ってユーザのニーズを満たしている。中でも日文研のユーザに馴染み深いであろうサービスが「ILL」(Inter Library Loan)、他大学・図書館からの図書や文献複写の取り寄せである。五〇万冊近くある日文研の蔵書でも、幅広い分野で学際的・総合的に活動する日文研の院生・研究者のニーズを満たすことは難しく、ILLに頼らざるを得ない場面は多い。平成二二年度に日文研から発注された依頼



は年間三五三五五件であるが、同年の大阪大学総合図書館が三三九三件、京都大学附属図書館が四二二〇件。構成員数が大きく異なる大規模大学と同じ規模で「IT」依頼を行なっており、我々がいかに他の図書館からの協力に支えられているかがわかる。

図書館の相互協力は図書の貸し借りだけにとどまらない。ライブラリアン同士で情報・知見を共有し、アウトプットしあう。またグループやコミュニティを構築して大きな課題の解決に取り組む。これらもまた重要な協力のあり方のひとつである。

例えば「日本専門家ワークショップ」という研修事業がある。国立国会図書館・国際文化会館の主催で、ライブラリアン等の海外の日本専門家を東京に招き、日本資料の入手・利用について約二週間の研修を行なう。国内外のライブラリアン・専門家による相互理解と人的ネットワーク形成が、名称や形を変えつつ一五年続いており、海外での人材育成に貢献している。また天理大学には「天理古典籍ワークショップ」という日本古典籍の取扱いに特化した海外ライブラリアン向けの研修がある。

二〇一二年八月コペンハーゲンでの日文研海外シンポジウ

ムでは、私も参加させていただき、北欧の日本研究者に向けたプレゼンを行なった。日文研図書館の紹介だけでなく、北欧内で利用できるデータベースや、ニーズの高い資料・情報についても解説した。これは私から海外の研究者に向けてのアウトプットであったが、同時にインプットでもあった。その準備段階では、スウェーデンの日本人ライブラリアンにご協力いただき、北欧での現状・ニーズについてアドバイスをいただいている。

ライブラリアンは図書館・情報のプロであり、専門家である。そして専門家同士が連携・協力しあわなければ、プロとしての責務はまっとうできない。資料課から毎年参加している EAJRS (European Association of Japanese Resource Specialists) は、ヨーロッパの日本研究ライブラリアンや研究者が連携・協力し合うコミュニティである。また NCC (North American Coordinating Council on Japanese Library Resources) は北米の日本研究ライブラリアンの集まりであるが、近年資料課からの参加は途絶えている。

協力は、自身の将来のためでもある

『相互協力』と言うからには、「協力してもらおう」とともに

「協力しにくい」こともしなければならぬ。そして「してもら」はもとより、「協力しにくい」こともまた他ならぬ自身のためと言えよう。他者との連携・協力を積極的に行なうことによって、存在感を示し、持っている価値を可視化させ、増幅させることすらできる。「協力しにくい」ことは、自らを活かし、生き延びていくためにも必要である。

このことは特に、日文研やその図書館のような中小規模の機関・施設にとって切実である。国内の災害・危機や経済的困難により、文教機関の統廃合も文化資源の受難も避けがたい状態は当面続くだろう。大規模大学でもない限り一機関が単独で成り立っていくことは難しい。一方で、個人的経験の範囲だが「国際日本文化研究センター」の名前や存在がまだまだ知られていないのではと思わされる場面も少なくない。自己紹介の際には、日文研がどういうところかを一から説明しなければならぬことが多い。皮肉なことに『日本研究』『Japan Review』のほうがよく知られていて、相手の図書館に並んでいるのを見て「これをおたくに贈っているのが日文研ですよ」と指摘すると驚かれた、という経験も何度かあった。

存在感を示し、価値を可視化・増幅させるために、積極的

に他者と連携し、協力しにくい。ライブラリアンとしての常識から言えば、これは何も特別なことではない。図書館の相互協力として、資料・資源の共有、ネットワーク形成やコミュニティ参加、積極的なアウトプットなど、本来行なうべきことを、行なうべくして、行なう。これに尽きる。

日文研図書館には日本研究の支援に必要な蔵書、ユニークな資料群があり、それを長年提供してきた知見がある。これらをもって枠を超え、国内外を問わず他者にはたらきかけていく。例えば、Webでの情報発信を強化する。NCCやFAIRSのような海外コミュニティと協力し、参加・交流だけでなく共に活動し課題に取り組む。研修事業に貢献する、など。もちろん、行なうべくして行なうに尽きるといえる。なかなか実現が難しいことも多い。かといって、待ちの姿勢で起こったことを受けとめていただけでは、自身の将来を明るいものとして想い描くことはできない。

日文研における研究協力活動としての、そして図書館の相互協力としての、研究情報・文献・図書館の提供。これを価値あるものとして将来も継続していくためには、これまで同様の資料収集・サービスに加え、その価値の可視化・増幅が必要である。そのために他者との連携を積極的に持つ、協力

しにいく。そのとき、図書館は単なる施設・蔵書群にとどまらない、『はたらき』を持った存在となるだろう。

協力していくことのひとつとして、二〇一三年二月には先述の「日本専門家ワークショップ」のシンポジウムに参加し、登壇させていただく予定である。別途機会があればご報告したい。

(国際日本文化研究センター資料課資料利用係長)

出版の現場より

Nichibunken Monograph シリーズ 編集長より

パトリシア・フィスター

モノグラフシリーズの意義

ご存じの方も多いと思いますが、一九九八年にスタートした Nichibunken Monograph シリーズ刊行の目的は、日本語を解さない世界の研究者に向けて、日文研専任教員の研究成果を発信することです。英語を公用語として使用する国が多いので、本シリーズの言語は英語を原則としています。当初か

ら、毎回一〇〇部を印刷し、日文研の送付先リストにある国内外の大学や研究機関へ寄贈しています。その一方、海外の出版社と提携すれば、部数がより拡大し配分枠も広がるということ、二〇〇九年に最初のケースとして、山田奨治先生の著作『*Shots in the Dark*』を、シカゴ大学出版局と共同で出版しました。このような共同出版を通じて日文研教員の活躍の舞台は一層大きな広がりを見せ、英語圏の学術世界で評価されるまでになっています。本シリーズのうち、鈴木貞美先生の『*The Concept of "Literature" in Japan (二〇〇六年)*』や、磯前順一先生の『*Japanese Mythology (二〇一〇年)*』などは、海外の大学の教科書として使われていると聞いています。

国際的な学問の世界において、モノグラフ(単著)は、シンポジウムの発表や報告書以上に永続的価値を持つと思われまます。本シリーズの最初の五冊はソフトカバーでしたが、さらに価値を高める狙いもあり、数年前からはハードカバーへと移行しました。実は、ある年の原稿募集の際に何人かの先生たちから、「ペーパーバック形式の今のデザインではインパクトが弱く、部数も少なすぎるので、自分の研究成果を英語にする場合は、海外の出版社に直接依頼する」と、言われたのがきっかけです。編集長としてはこの時、もっと魅力的